

ねぎ

黒斑病・葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）

発生の動向

- 1 令和3年の発生面積率は76.7%（平年55.0%）であり、平年より高かった（図1）。
- 2 時期別では、平年より早い6月下旬から発生が見られた。発生圃場率は平年より早い時期から高くなり、期間を通して平年より高く推移した（図2）。
- 3 10月上旬の調査では、すべての圃場で葉枯病の黄色斑紋病斑が確認された。
- 4 葉枯病菌は、べと病やさび病、黒斑病の病斑上や、ネギハモグリバエの潜葉痕上に病斑を形成することがある（令和元年度および2年度病害虫防除技術情報参照）。

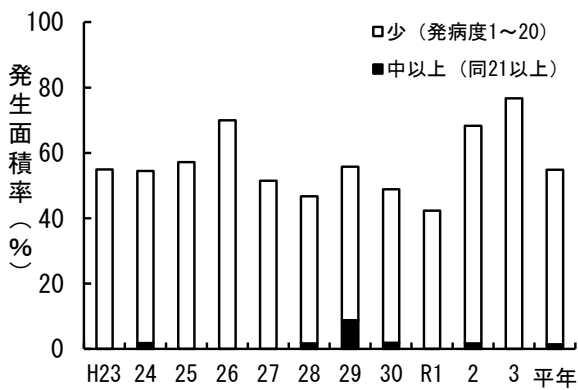


図1 黒斑病・葉枯病発生面積率の年次推移（年間評価）

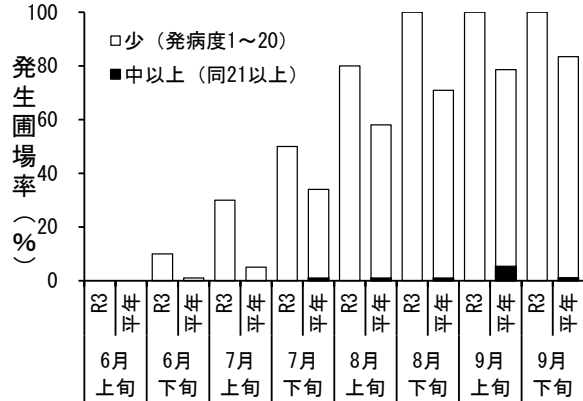


図2 巡回調査における黒斑病・葉枯病の時期別発生圃場率

防除対策

- 1 黒斑病・葉枯病共通
 - (1) 黒斑病・葉枯病の発生を抑制するため、他の病害虫を含めて薬剤防除を計画的に実施する。
- 2 葉枯病

葉枯病の褐色斑点病斑（図3左）の発生を防ぐため、以下の点に注意した防除を実施する。

 - (1) 病原菌は収穫残さ等で越冬して伝染源となるため、被害茎葉や被害株等は圃場外へ持ち出して処分する。
 - (2) 8月下旬以降は葉枯病菌の感染が特に多くなるため、効果の高い薬剤を用いたローテーション散布を実施する。
 - (3) 生育後期に肥料切れ等で草勢が衰えると発生が助長されるので、肥培管理を徹底するとともに、収穫遅れにならないよう注意する。



図3 葉枯病（左：褐色斑点病斑 右：黄色斑紋病斑（赤枠内））

ネギアザミウマ

発生 の 動 向

- 1 令和3年の発生面積率は98.9%（平年83.2%）被害圃場率は63.3%（平年42.0%）であり、いずれも平年より高かった（図1）。
- 2 時期別では、5月中旬から発生が見られ、5月下旬に発生圃場率が急増し、被害程度も増加した。6月上旬～9月上旬まで、発生圃場率、被害程度ともに平年より高く推移した（図2）。
- 3 春期が高温で経過すると、早期に発生する可能性がある。
一般に、高温及び乾燥の気象条件で発生が多くなり、夏期には2週間程度で1世代を経過するとされる。
- 4 前年の多発圃場では越冬密度が高いと考えられる。

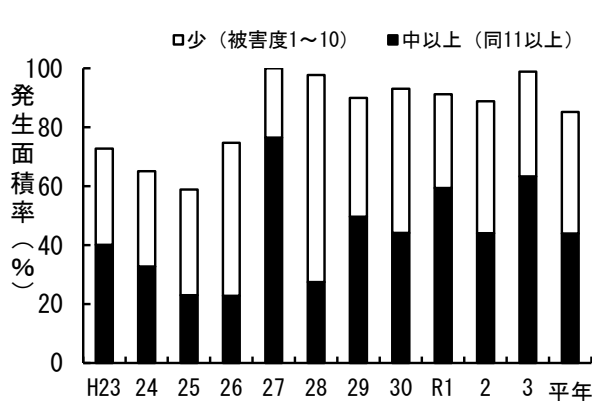


図1 ネギアザミウマの発生面積率の年次推移
(年間評価)

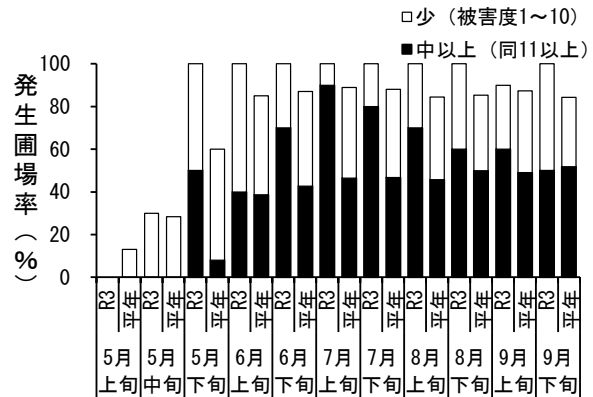


図2 巡回調査におけるネギアザミウマの
時期別発生圃場率

防 除 対 策

- 1 被害が早期から発生する可能性があるため、定植の時期を問わずかん注処理剤を施用してから定植する。
- 2 発生が見られる圃場では、効果の高い薬剤を選択し、7～10日間隔で防除を行う。
発生が多い場合は、特別散布等のこまめな防除が必要である。
多発すると防除が困難となるので、発生初期から防除間隔が開かないように防除する。
- 3 特に周辺に発生源（畦畔雑草や越冬ねぎ圃場等）がある場合や連作圃場においては、発生状況に注意する。
- 4 薬剤抵抗性の発達を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。